



ロカノンの世界/Rocannon's World (1966) /
アーシュラ・K・ル＝グ
イン (青木由紀子訳) /
サンリオ (文庫・12/25
刊・¥380)

本書は、半ば『ゲド戦記』であり、半ば『闇の左手』であり、そして何割かは『所有せざる人々』や『オルシニア国物語』であるだろう。これが、ル・グインの処女長編である。

プロローグに初期短編「セムリの首飾り」を置き、そして、後は、同じ舞台に降り立ったロカノンの物語だ。風馬に乗り、異星の侵略者を倒すために旅する、いわばトラペローグである。妖精たちの棲むこの異世界に、すいこまれ、やがて伝説となっていく主人公ロカノンの物語は、妙に静かで、北欧の黎明を思わせる。それは、SF的な描写というより、ファンタジーに近いものだ。作者の言っているとおり、半ばファンタジーなのである。ただ、中途半端さはない。単純な物語の中から、どこかル・グイン独特の、異世界の雰囲気伝わってくる。

定石どおりに、ここは、処女作にすべてがある、と締めくくってでもいい——もう一つ付け加えるとしたら、それは、失われた可能性とでも言えるものだろう。あるいは、ル・グインがそうになっていたかもしれない、(いま一つの)現在の姿が、ふと浮かんだりもするからだ。(俊)